



共生の時代

'08
10月

●発行:グリーンコープ共同団体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

世界や日本の食料事情を学ぶ学習会が8月25日福岡市で開催され、各単協から組合員・職員など422人が参加しました。講演は農業ジャーナリスト大野和興さん(3面に講演要旨掲載)。片岡宏明さん(グリーンコープ連合専務理事)からは、グリーンコープの食べもの運動の方向性について話がありました。グリーンコープの畜産生産者は共に食べもの運動をすすめていく仲間としてアピールしました。この学習会を受けて「40万人組合員食べものアンケート」に取り組み、グリーンコープの食べもの運動へつなげていきます。(3面に関連記事)

原油や穀物などの高騰、そして世界経済の破綻によって、今、人間が生きていくために不可欠な食料が危機的な状況に陥っています。グリーンコープはどのような時も「食の安心・安全」を守るという姿勢を貫いてきました。そして厳しい現状だからこそ、みんなが助けあって安定した「食」のあり方を探っています。



2008年度
秋の月間

オールグリーンコープ学習会

5年後10年後をイメージして

今日、明日を生きる

食を取り巻く状況を学び、グリーンコープでできることは何かをしっかりと考えましょう。吉田文子グリーンコープ共同代表理事の力強い挨拶で学習会がはじまりました。

「食べもの」の「安心」「安全」そして「安定」に向けて 片岡専務講演要旨

今、世界の穀物在庫は、食料危機が起きた1970年代を下回っています。地球規模の異常気象による不作やバイオ燃料用穀物の需要増、新興国(中国やインドなど)の食料需要増加などが原因です。その結果、穀物の価格は高騰しています。食料輸出国も生産高の減少で輸出を制限すると宣言しました。工業製品を売り、外国から食料を買うことで成り立っていた日本はまさに危機的状況にあります。その上、穀物商社は大手2社を除き、少子高齢化による人口減少と経済縮小が予想され商売上魅力のない日本市場からすでに撤退しています。買う食料も、食料を売ってくれるところもない、厳しい状況へ推移しています。

日本の食料自給率は40%

(カロリーベース)ですが、家畜飼料用トウモロコシの生産は0%です。輸入が止まれば畜産物は大打撃を受けます。これはとても深刻な状況です。

これまでグリーンコープは、日本の農業を守るために、安心・安全な食べものを確保するために、「国産農産物」と言ってきました。しかし、現在の世界的な食料の危機的状況の中でどこまで食べものを確保できるかが心配です。

また、食べものの「安心・安全」を求めて、グリーンコープは生産者が継続して再生産できる価格を設定するなど、共に関係を作ってきました。これこそまさに「安定」のしくみと言えます。今まで「安定」については意識してきませんでしたが、生産・製造の「安定」がなければ「安心・安全」もありません。「安定」も意識的に考えてグリーンコープの食べもの運動を展開していく時期が来たのです。これからは「安定」を基盤に、バージョンアップ(進化)した食べもの運動を実践していきます。

さらにグリーンコープは、食べものが作られる地域の農業と環境に着目した

グリーンコープ生産者からのアピール



産直豚肉生産者
綾豚会 江島 鉄朗 さん

私たちの願いはただひとつ「買ってください。食べてください」です。養豚は元々とても資金が必要で、加えて飼料代の高騰で廃業する養豚家が増えています。私たちはやるわけにはいきません。みなさんとの大切な関係があるからです。どうぞ日本一の豚肉を食べて応援してください。



産直豚肉生産者
紅会 中村 康則 さん

組合員みなさんと直接会って「頑張ってください」と言われることがなにより励みです。飼料の大豆・小麦の値段が2〜3倍になって経営は大変ですが、みなさんと共にこの難局を乗り越えたい。あの時は大変だったけどよかったね」と一緒に話せるよう頑張ります。



酪農生産者
代表 矢野 桂吾 さん

「noni-GMO飼料を使った牛乳を作りたい」。組合員みなさんの思いが伝わり、今日まで酪農をしてきました。飼料・資材の値上がりで苦しい経営です。組合員みなさんに飲んで支えてもらいたいです。酪農ホームステイ、交流会で出会った人たちの顔を思い出しながら、これからも日本一安全な牛乳をめざして頑張ります。

関係を進めていきます。その一つとして国産ナタネの産地である北海道の滝川農協との関係を強化します。ナタネは連作ができないので、次に黒大豆を植えるという輪作をします。これは黒豆納豆の原料になります。産地からは「経営が安定し、ナタネの栽培を継続できる」と喜ばれています。このような関係を他の産地にも広げていきます。

また、生産者と共に、外国産畜産飼料の国産への切り替えをめざします。そのために取引先メーカーの製造過程で出る端材(パンくずなど)を飼料にするといった、食べものを無駄にせずにグリーンコープの中で「循環」させる生産のしくみを作ることに挑戦します。

「国産農産物を食べ続ける大切さ」と必要性、そして生産者の思いを組合員に伝えていきたいと思います」とグリーンコープ生協ふくおか理事長田原幸子さんのアピールで学習会は終了しました。

Contents

グリーンコープを創った人たち(7)	
グリーンコープ福祉連帯基金初代理事長 石三 修	
生協って、大多数の人にとって必要で、なおかつ一人ではできないことをするところ	2
2008年度秋の月間オールグリーンコープ学習会	
グローバル化のなかの農と食	3
ーアジアと日本の現場から考えるー	
特集	
脱原発社会をめざして	4・5
グリーンコープの20年!	
メーカー・生産者からのメッセージ(7)	
株地の塩社	
環境を、生活を守るせつけんをつくり	6
塩のような役割を果たしたい	
老いる事・ほける事・死ぬ事を考える	
グリーンコープがめざす生活協同組合⑦	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ	
未来へつなぐ20年 私の思い	8

20年の歴史を創った原点に戻る



グリーンコープ福祉連帯基金
初代理事長 石三 修



「グリーンコープ福祉連帯基金」という機関がつい数年前までグリーンコープに存在した。1994年にグリーンコープの地域福祉を担うために創設され、「ふくし情報でんわ」や在宅支援事業、福祉用品事業などを生み出し、2003年には在宅支援事業が社会福祉法人化されるのを見届け、翌2004年に発展的解散をした。

石三はその「グリーンコープ福祉連帯基金」の初代理事長だった。地域福祉という未開拓の分野に、「ノーマライゼーション」や「ユニバーサル」という単語に象徴される世界を、日本の土壌に合う福祉に翻訳してみせた。

生協って、大多数の人にとって

必要で、なおかつ一人では

できないことをするとこころ

「福祉」という夢を
プランニングする

1988年、「共生」という観念的なスローガンを掲げて出発したグリーンコープは、当時その具体的な青写真を持つ程のゆとりはなく、1993年のグリーンコープ通常総会で採択されたマスタープラン「夢のかたち」で、ようやく中期基本構想を得るに至った。その「夢のかたち」は、理事長会で起案された壮大なプランで、今もグリーンコープはその実現の途上にある。マスタープランは「教育・文化」、「環境・農業」、「地域福祉」の3点をメインに、それぞれが別々のものではなく有機的に結びつきながら、重層的にグリーンコープの枠を越えて地域に広がることをめざした内容である。その時点ではまさに「夢」そのものだった。

「地域福祉」の具体化は当然のように石三に委ねられた。彼は別の文脈から、すでに1991年に福祉や協同組合、環境をテーマにドイツ、スウェーデンを視察し豊富な知識を得ていた。また学生時代から20年以上一貫して生協に携わってきたという来歴の持ち主。現在のグリーンコープ

生協をおいたを立ち上げ、当時はその専務理事であり、同時にグリーンコープ連帯の常務理事でもあった。石三はその後1993年にスイス、イタリアの福祉事情を視察する。そして「公」が充実したスウェーデンや協同組合がオールラウンドに展開するイタリアに、日本型福祉の展望を見出す。ヨーロッパにおける福祉は、国民性は異なっているが、他者に向ける眼差しや「質」という精神性では一様に高い。その百年すすんだ歴史をいかにプランニングするのか。彼は実にいいねい実務的な構想を練り、それがグリーンコープの福祉のコアとなった。



代表を務める「マルシェ」(利用者47人)のメンバーと共に

グリーンコープにとって1990年代初頭に石三がいたことは、まことに幸運だった。

必要とされているところに
援助の手をのべる

一方、石三その人にとって、福祉との真の出会いには、個人的で衝撃的なものがあった。38歳の時初めて授かった子どもが、知的障がい(ダウン症)を背負っていた。ショックを受けた。子どもが不憫でたまらず、将来を悲観し落ち込んだ。作家の大江健三郎が長子の障がいを知った時、「子どもも自分も生命の側にあるというより、死んだ人間の側にあると感じる心的感覚

人間という不思議への
限らないアフロチ

大分市戸次。畑の中に赤い三角屋根が愛らしい就労支援施設マルシェが建つ。昨年4月に社会福祉法人ラポールの施設として完成。ラポールの本部も同居している。石三は病院勤務を経てラポールを理事長として設立、現在はマルシェの施設長を務める。ラポールはまた、グループホーム、ヘルパーステーション、障がい児のタイムケア事業施設も昨年相次いで開設した。長年にわたる念願が叶った。

石三は言う。「そうね。メニュー的には終わった。でも、障がいを持つていて人をどうするかといった時、まだとば口に立つたばかり。例えば一口に自閉症というが、ある分野の能力が超人的に突出した人とか、皮膚感覚が過敏すぎる人とか、とにかくさまざまなのだということがよく分かってきた。皮膚感覚が過敏な人は普通のシャツの縫い目がチクチクする。そういう人には乳児の肌着のように縫い目を表に出すとかすれば解決するでしょ。分かってきたから対応できるようにになった」。

そのように「光」がさしはじめた中で、掘り下げたいテーマは無限だ。1949年生まれの石三は来年還暦を迎えるが、彼にそのことはさしたる意味はないようだ。

「で、あなたはどうかしたいの? どうして欲しいの?」一人ひとりに体躯をかがめて問いかけることから彼の毎日とすべてがはじまる。

2008年度 秋の月間
オールグリーンコープ
学習会

グローバル化のなかの農と食

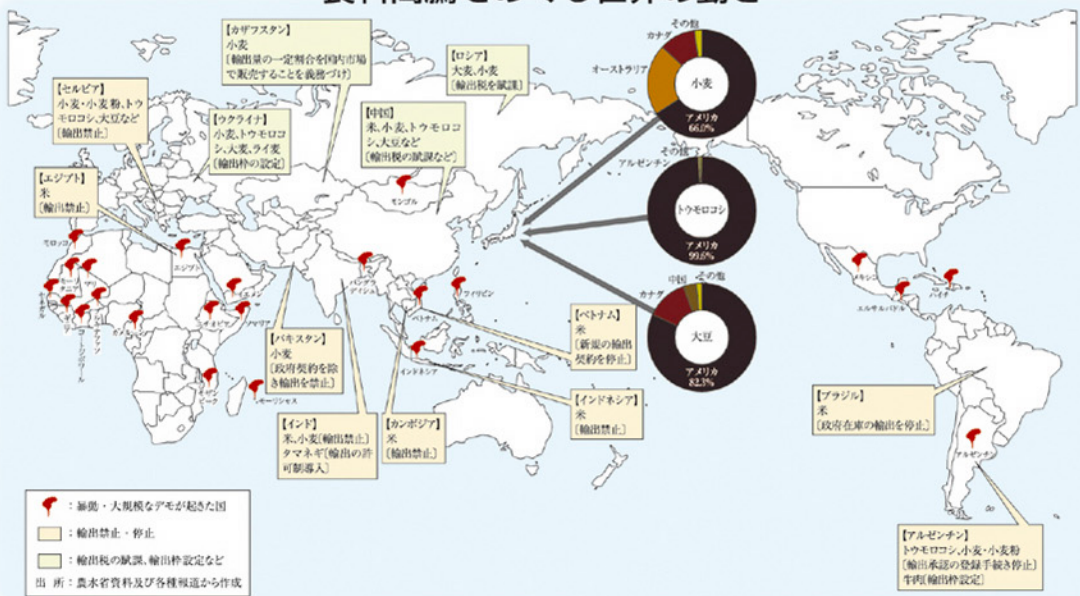
— アジアと日本の現場から考える —



大野 和興さん

農業・食料問題ジャーナリスト。アジア農交センター・脱WTO/FTA草の根キャンペーン世話人、国際協力NGO・日本国際ボランティアセンター理事。日本とアジアの村歩きをし、そこから見える問題を鋭くえぐり出し、発信し続けている。

食料高騰をめぐる世界の動き



グローバル化のなかでは、農産物や工業製品、自然や文化を命まで、地球上のあらゆるものに値段が付けられ、売り買いされています。また、効率を上げるための競争が激化し、貧しい層と富める層の二極化はますます激化しています。その結果、人間の最低の権利である「食を」ということさえ保障されず、飢餓と貧困に苦しんでいる人たちが増えています。このような状況を受けて、グリーンコープは未来へ向け、どのような食の運動を展開していくのか、考えていくことになりました。大野和興さんの講演要旨を紹介します。

今 世界を襲っている食の問題には3つの側面がある。1つは「食の量」、2つ目は「食の質」、3つ目は「食の質と量の両方にかかる問題」。この3点を中心に、今「食」を巡って何が起きているかを紐解き、私たちに何ができるかを考えてみたい。

食と農の世界が音をたてて崩れている。今、世界中をグローバル化の風が吹き荒れている。それを農業の現場から見ると、農も食も国境はなくなっている。中国雲南省やタイ北部、カンボジアやラオスなどアジア諸国の農村部では、最近ゴムブームで沸いており、田んぼを潰し森や林を破壊してゴムの木がどんどん植えられる。新興国の自動車ブームによってタイヤに使うゴムが必要になってきている。また、バイオ燃料の原料となる油ヤシやキャッサバも同じような状況になっている。これは世界で起こっている、ほんの断片に過ぎない。

農地は本来農民がそこに住む人々のための食糧を栽培する場所だ。それが食糧ものではないものに取って代わっている。ここで問題なのは、①司っているのが農民ではなく大資本である②その作物が地域の人にはまったく関係のない作物である、という点だ。タイの大学のウォルデン

・ペロー教授は「グローバル化の風が吹いた世界食糧危機」について、「一つの生産様式が他の生産様式に移っている。これは農民解体である」と言っている。解体とは「もはや元に戻らないくらいに壊れてしまふ」ことである。ここでいう一つの生産様式とは「農民による農業」。形態や規模はいろいろであるが、家族農業、農民が主役の農業である。「他の生産様式」とは、多国籍企業や大資本による農業の企業化である。企業は、初めはよい値段で買い取る。政府が補助金をつける。農民は借金をして取り組む。農民は借金が、ようやく収穫となる頃には価格が暴落する。これまでもこのように農民が翻弄される構図はあったのだ。

しわ寄せは弱者にすすむ貧困化 グローバリゼーションの中ですすんでいるもう一つの問題は「貧困」である。市場競争の中では、勝つか、負けるか、だ。一部の人が結局勝つことで、世界中に貧困が蔓延していくことになる。日本でも生活保護基準以下の収入で暮らしている人は全世帯の2割を越えている。同時に自殺者も増えている。それが日本の現実だ。

このような状況の中で、食品市場も大きく縮小している。安く供給しないと売れない。大手はさらに安く売ろうとする。そこで削減するのは、労働もしくは原材料のコストである。事実、福祉労働や食品産業の現場では不安定就労は増えるばかりだ。大手牛丼チェーン店は元店長から労働基準法に抵触により刑事告訴されている。時給820円のアルバイト店長の残業代不払が原因だ。毎日16時間働いて手取りは10万円を越えなかったという。食品安売りが



※上下写真は提供

商品作物を植えるために森を焼き払ってしまった（ラオス）
中国雲南省南部のタイ族自治州に広がるゴム園

コンベニアの20歳代の元店長はうつ病と過労で退職した。それが労働搾取の実態である。そうしないと、やっていけない外食産業の実態があるのも事実だ。中国でも同様のことが起こっている。過重労働でローコストを維持するという日本の激しい市場競争は中国に移り、現地の人たちは猛烈な低賃金で働かされている。それが「毒入り餃子」ブームや「毒入り餃子」ブームとなっており、日本に跳ね返ってきたのだ。日本企業はまず日本の食の担い手を買叩き、その後中国の食と労働を買叩いた。今や中国はアフリカを買叩こうとしている。貧困の玉突き、農と食の負の連鎖と増殖が起こっている。

人間らしさが創るもう一つの農業をめざして WTO（世界貿易機関）が破綻し、今はFTA（自由貿易協定）やEPA（経済連携協定）による二国間協定へとシフトしてきている。現在日本とオーストラリアのFTA協定がすすんでいる。今、日本の農業の最大の危機が到来している。オーストラリアから安い米や牛肉、小麦、乳製品などが輸入され、代わりに自動車や輸出する、それによって経済効果を狙おうという目論見だ。しかも効率化を名目に小さい農業を切り捨て、農業を企業化するのが農業政策に盛り込まれている。このままでは日本の農業も酪農も地域経済も破綻するだろう。

では、私たちは何をしたらよいのか。絶望するのはなく、外と足元の両方から世の中のしくみを変えていくことが求められている。今、動き出している農民も現れてきている。また、反貧困の運動が若い人を中心に広がっている。「みんなに食わせろ」、そんな制度をつくっていくことが大切だ。貧困の連鎖は世界に広がっている。国際連帯をつくっていくかなければならない。「もう一つの生産様式」は、多国籍企業ではなく、市民と農民がつくりたいと思う。その主役となるのが、組織された消費者連合ともいえる「生活協同組合」ではないだろうか。大きな戦略のもとにこれからの事業戦略を持ち、「みんなが安心して食べていける」世界を取り戻そう。そんな「世直し」を、社会のしくみとしても、暮らし方・生き方・食べ方としても、足元から運動としてつくっていく。私もまた共通の意志を持つ仲間として運動に連なっていきたいと願う。



藤田 祐幸さん

慶応大学物理学助教授を07年3月退職、日本物理学会所属。著書：『原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識』（東京書籍・共著）

真の科学者として 原発問題を捉える

グリーンコープ生協さがではグリーンコープ誕生20周年記念企画として、8月30日「明日を人まかせにしないー未来の子どもたちに今私たちができること」をテーマにコンサート&環境講演会が開催されました。

今回はこの企画の中から、藤田祐幸さんの原発に関する話をまとめました。

弱者の側に立つ科学者

私が物理学者になろうと考えたとき、広島・長崎の原爆と向きあわざるを得ませんでした。しかし、原子力に関する文献にも放射能による被曝の問題は書かれていない、そのことに強い不信感を持ちました。『原爆』を作る「マンハッタン計画」には世界の名だたる物理学者の多くがかかわったのです。

その頃、原子力発電所が、あちこちに建ちはじめ、住民の反対運動が起きていました。水俣病の問題でチッソ本社前に座り込みをしている患者さんたちの支援の末端にかかわる中で、公権力の横暴さも目にしました。そして1979年にアメリカのスリー

マイル島で原発事故が起こりました。それを契機に、私は物理学者をやめました。

水俣病も原発も科学者が真実を伝えていないのです。私は、漁民や農民の立場にたち、科学者の欺瞞を見抜き真実を暴く手立てを提供する科学者になることにしました。

そして今日に至ります。

放射能の恐怖

大切なのは現場で学ぶことです。事故後のチェルノブイリにも行きました。半径30km以内は放射能汚染で人間が住めない廃墟となった地域です。しかし、その中で人が生活しているのです。そういう場面に直面し、断腸の思いでたずねました。

2003年硝煙の消えていないイラクへ、劣化ウラン弾が使われた証拠を集めるために訪れました。劣化ウラン弾は原発の燃料となるウラン濃縮の過程で廃物としてできる劣化ウランを原料としています。1992年の湾岸戦争時、イラクで使われた劣化ウラン弾の被曝によって今日多くの子どもたちががんに苦しんでいます。現在劣化ウラン弾で被曝した子どもたちは、5年後、10年後に同様にがんが苦しむことになり、日本ができる貢献は、自衛隊を送ることではなく、「広島・長崎」の経験を生かした子どもたちへの医療支援です。

真の科学者として

原発を推進する科学者が、危険性を知らないわけではありません。しかし、原子力工学の学者にとつて、原子力発電がなければ仕事が無くなってしまいます。放射性廃棄物（死の灰）の危険性も十分にわかってはいます。にもかかわらず、原子炉から排出される高レベル放射性廃棄物を地下300mに埋設し3万年たてば問題は無いと言うのです。科学とは、実験し実証することが前提です。いかなる実証もできない3万年後に科学者としてどのような責任を負うのでしょうか。

また、原発が地震に弱いことは1960年代の建設当初から分かっていた。立地には地震が起きていない空白地帯が選択されました。しかし、1970年代には、地震の原因が地殻プレートの問題であることが分かり、地震が起きていない場所は「まだ起きていない」ということにすぎないことが分かってきました。1980年代から日本は地震の活動期に入っています。地震国日本で、地震の起きる可能性がないところは無いと言えます。良心ある学者なら、原発の安全審査をもう一度やり直すべきと言わねばならないのです。

コープは、食べものの安全性という観点から放射能汚染状況を把握するために、放射能測定器を購入し、自前の「放射能汚染測定室」を設置しました。その運営にあたる運営委員会には研究者や市民団体の代表も参加、食品中の放射能の測定からデータに対する考察や

した。しかし、その後も検査は継続し、結果を毎月本紙に掲載しています。

「グリーンコープ脱原発政策」の策定

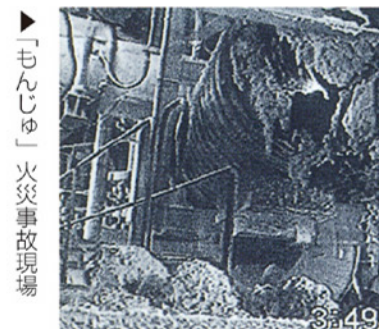
原発に反対する姿勢を、グリーンコープの政策にまとめるために、組織委員会主催で3回の連続講演会を

た。

さらに、単協に連帯し、署名活動などに取り組み、政府や電力会社へも働きかけてきました。

「明らかな地域間格差」

現在、日本の原子力発電所は全部で55基、総発電量は4900万kW。これは



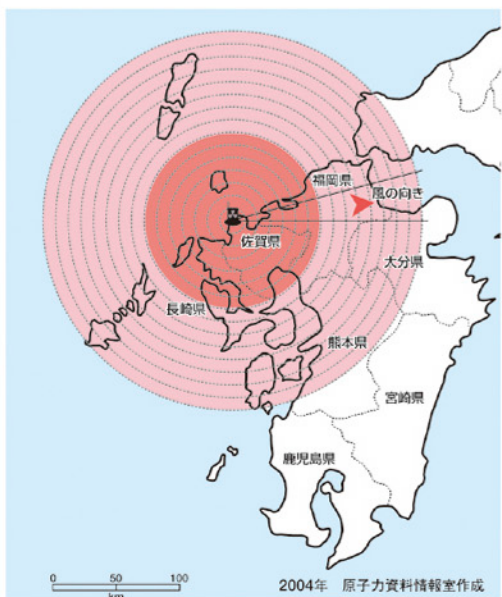
「もんじゅ」火災事故現場

プルサーマルって何？

プルサーマル炉で大事故が発生した場合の被害予測

プルサーマル炉では現行のウラン炉よりも距離にして約2倍の被害拡大が予測されている

- 半数が即死する放射線量の範囲 (3シーベルト以上)
- 急性障害、一部死亡の放射線量の範囲 (1シーベルト以上)



プルサーマルとは、核燃料サイクルの一環として位置付けられ、プルトニウムとウランを混ぜたMOX燃料を通常の原発施設で燃料として燃やすという技術だ。

原発の軽水炉はウラン燃料を燃やすために設計されたもので、プルトニウムを燃やせば問題が生じる。MOX燃料はウランとプルトニウムが均質に混ざっていないことから、同じ燃料集合体の中でもプルトニウムの塊がある部分では核分裂が激しく起こり、燃えむらが生じてしまう。そのため、原子炉の制御は難しく、燃料自体の健全性も損なうことから、国や電力会社はMOX燃料を軽水炉で使用する場合は炉心の3分の1以下にして稼働するとしている。こうした危険性があるため、原発でのMOX燃料の使用は、世界でもわずか1割程度に過ぎない。しかも、使用済みMOX燃料は100万年の隔離を必要とする高レベル放射性廃棄物だ。にもかかわらず、その処理は、2010年から考えるとなっている。また、プルサーマルは電気事業連合の試算では1兆円にも満たない利益のために12兆円を超える資金が投入されるため、経済性もまったくないと言える。

チェルノブイリ原発事故

1986年4月26日、旧ソ連（現ウクライナ）のチェルノブイリ原子力発電所で大爆発が起きた。定期点検の途中に行った出力調整実験によって、制御棒が溶解し、爆発したのだ。空高く吹き上げられた放射性物質（死の灰）を汚染した。チェルノブイリ原発周辺30kmは人の住めない大地となり、14事故によって放出された放射能の70%が白ロシア共和国（現ベラルーシ）に、全国上の3分の2が放射能で汚染された。風下となったヨーロッパ・



コンクリートで固められているチェルノブイリ原発4号炉の「石棺」。

老朽化のため、放射能が漏れているとも言われ、第2次石棺の構想が計画されている。→



大地や水、農作物も放射能を食べるものがないと言えた。現在、4号炉は石棺とクリートの塊で密閉され、時間の経過から亀裂など放射能漏れなどが心配されている。

事故による大気や食べもの汚染により、多くの人が体調を崩した。中でも放射線の子どもの甲状腺を蝕み、もたらした甲状腺がんが急速にも貧血、運動機能の低下などが発症している。に苦しむ人々や適齢期に達した結婚、出産による次世代への被害状況なども不安な状況が続いている。

共に歩んだ20年



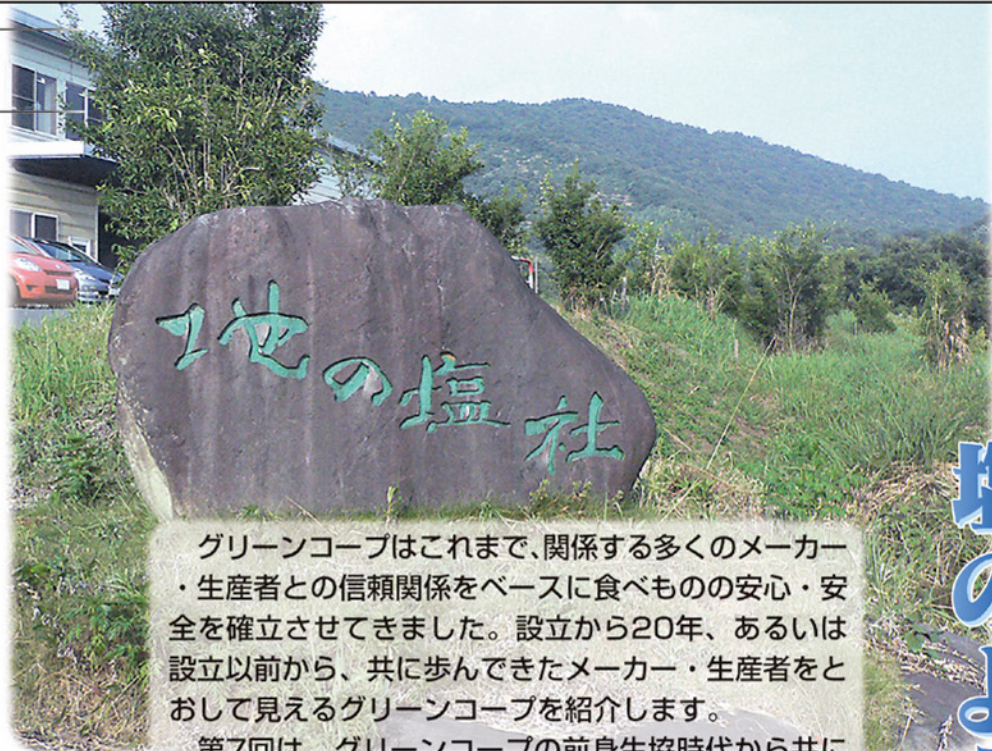
(株)地の塩社



常務取締役 田口 恵さん



代表取締役 田口 淳さん



グリーンコープはこれまで、関係する多くのメーカー・生産者との信頼関係をベースに食べものの安心・安全を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から、共に歩んできたメーカー・生産者とおして見えるグリーンコープを紹介します。

第7回は、グリーンコープの前身生協時代から共にせっけん運動をすすめてきたメーカーである(株)地の塩社の代表取締役の田口淳さんと常務取締役の田口恵さんに話を聞きました。熊本県山鹿市で“環境を守るための洗浄剤はせっけんである”という信条を掲げ、地道に事業と運動を両立させてきました。

環境を、生活を守るせっけんをつくり 塩のような役割を果たしたい

地

の塩社の創業は1975年、高度経済成長と共に合成洗剤が急激に広まっていた時代。一方で、公害の原因である化学物質の問題提起をするレイチェル・カーソンの『沈黙の春』や有吉佐和子の『複合汚染』などが発刊され、環境問題に警鐘を鳴らしていた頃でもある。

創業者である故田口知徳さんは、それにいち早く反応した。合成化学製品メーカーの研究員だった田口さんは誰よりも化学物質の怖さを知っていた。だからこそ「安心できるせっけん会社」と40歳で脱サラ、妻と二人だけでスタートをきった。

「父は海釣りが趣味でした。その現場で工場排水の垂れ流しや海水の汚染を間近に見ていたようです。研究者であると同時に生活者としての危機感から居ても立ってもいらなかったのです。『しょう』と田口恵さんは語る。父親でもある創業者の思いは現在、2人の子ども（淳さんと恵さん）に引き継がれている。

回収した廃油を原料にリサイクルせっけんの製造

社名の「地の塩社」は、「汝らは地の塩である」という聖書の一節からとった。そこには「せっけん派が少数派であることにくじけないで、むしろ、塩

グリーンコープで取り扱っている地の塩社製品(一部)



のように少量でありながらも世の中に対し果たすべき役割がある」という創業者の思いが込められている。当時は琵琶湖の水質汚染が社会問題化するなど、リネ酸系の合成洗剤追放が叫ばれると共にリサイクルせっけんが注目されはじめた。地の塩社は地域と連携して廃油を回収、それを原料に粉せっけんを製造しはじめた。そこには「売れるものを売る」のではなく、「本当に大切なものを育てながら売る」という一つの信念が貫かれる。しかし、創業は順風満帆とはいかなかった。ていねいに手作業で行うせっけんづくりには熟練した技術力とそれ

を習得するための時間が必要だった。せっけんの製造に関する試行錯誤は数多く続いていた。併せて、製造したものを商品として利用してもらわなければ事業にはならない。販路の開拓も大きな課題だった。

グリーンコープ 取り扱い商品へ

販路を求めて熊本市を奔走していた1979年、設立したばかりの、ある地域生協に飛び込んだ。その頃は九州各地に環境や公害などの問題提起を旗印に独特の理念を掲げた地域生協が誕生していた。その生協もちょうど自分たちの考え方に沿うせっけんメーカーを探しており、お互いに求めあうかのように出会った。それが旧共生社（現グリーンコープ生協くまもと）であり、グリーンコープとの取引の始まりだった。

地の塩社の最初の商品「リサイクル油（廃油）」でつくる「洗濯用粉せっけんクリーン65」。その後組合員による名称公募で独自ブランド「マイマミーズ65」となり、そのままグリーンコープ連合へと引き継がれた。ところが、順調に滑り出したかに思えた両者の関係は大きな転機を迎えることになる。共にせっけん運動を推進する同志として相互に良い関係を築いてきていた矢先のことだった。CM効果で合成洗剤が生活の中の洗浄剤のすべてを席巻し、その勢いになってきていたのだ。グリーンコープは合成洗剤を取り巻く状況を踏まえて、総合的に取り扱っているせっけん商品の整理・強化を理事会を中心に検討し、その考え方をまとめた。その中で、「マイマミーズ65」の打ち切りが決定されたのだった。

関係性のつまずきが その後の自立を促した

1992年3月12日付の朝日新聞全国版に「洗濯用せっけんの伸び悩み、リサイクルせっけんのメーカーに大きな危機」と題したセンセーショナルな記事が掲載された。「マイマミーズ65」を整理することにしたグリーンコープへの批判と販路を失いピンチに立つ地の塩社に関する記事だった。これについて、グリーンコープは「相互のコミュニケーションのつまずき」

であることを反省し、速やかに事態の解決に向かった。結果的に「マイマミーズ」は単協での取り扱いとなり、両者は改めてよりよい関係性の構築に向かうことができた。当時を田口淳さんは振り返る。「あの頃は取引の8割がグリーンコープさんでした。新聞記事と一連の事態は、寄りかかっていた自社のあり方を見直すきっかけとなり、あれから遠くは東京まで出掛け、販路を開拓することになりました」。

「グリーンコープさんから大切なことを学びました。言っていたことが本当にありがたかった」。今では台所用せっけんや浴用せっけんはもちろんシャンプー・リンスなどのせっけん類から「布ナプキン」まで10種類以上の商品をグリーンコープに供給するまでになった。

せっけんを中心に 環境を守る メーカーとして生きる

今や、地球規模で環境保全が第一義的なテーマとなり、環境配慮型の商品づくりが求められる時代となった。せっけんは口ハス的な生活には欠かせない商品としての存在を高めている。地の塩社は「ものづくり」として独自性を追求し、自然の素材にこだわり、じっくりと商品を育てている。地元・山鹿を打ち出したせっけんや、せっけんを積極的に使っている黒川温泉との共同開発商品も手掛けた。創業者の意志に忠実に、社会の中で塩のような役割を、地の塩社はこれからも果たし続ける。

老いる事・ぼける事・死ぬ事を考える

宅老所よりあいの取り組みから

グリーンコープ共同体福祉委員会拡大学習会



下村 恵美子さん
宅老所よりあい代表
社会福祉士・介護支援専門員

ぼけても住み慣れた町で暮らしたいーそんな当たり前の思いを形にした「宅老所」は福岡市の小さな町で誕生し、いまでは全国へ広がっています。7月24日福岡市で、宅老所よりあい代表・下村恵美子さんを講師に共同体福祉委員会主催の学習会が行われ、各単協から約100人が参加しました。

「宅老所よりあい」は17年前、あるひとり暮らしのお年寄りのために作ったのがはじまり。当時、老人ホームの仕事に限界を感じて辞めた私に、「マンションにひとり暮らしのお年寄りがいる。老人ホーム入所の説得をしてほしい」と民生委員から頼まれた。訪問すると「自分はここで暮らす。ここが野垂れ死ぬ覚悟してるといい」と言う。この人とかかわることは面白そうだった。そこで、老人ホームで働いていた仲間3人に声を掛け、そのお年寄りが通う場として宅老所を作った。場所は福岡市中央区地行。そのお年寄りの自宅マンション近くのお寺のお茶室を借りた。一人のためにはじめたことだが、その後利用する地域のお年寄りも増え、近くの民家を改造し、通う、泊まる、いざとなれば住むこともできる施設へと変わった。

宅老所とは、自宅で生活

し地域で暮らし続けることを支援する場所。支える人や場所があれば認知症でも地域の中で暮らすことができる。認知症は老人ホームに入るなど環境の激変で症状が進行すると言われている。

◆ ◆ ◆
今の社会は「生きにくい、ぼけにくい、死にくい社会」になっている。例えば人間は死ぬ前は食べられなくなり、飲めなくなるのが自然。ところが病院に搬送されると、体が受けつけないのに点滴を流し込まれる。「宅老所よりあい」では死を自然なものであると受け止めている。入所者の場合、可能な限り家に連れて帰ることを提案する。家族に、そして孫に祖母の死を見てほしいからだ。

死の床にいた祖母の足を揉んだり汗を拭いてあげるなどの世話を、孫にも是非させてほしい。この体験をした子どもは必ず他人の命や自分が生きること大切になれるようになる。子育てと老いの問題はつながっている。自分の命にながらる人の最後にどうかかわるか、非常に大切なこと。もう一度自然な老いと死を私たちの生活の中に取り戻すことが必要だ。

◆ ◆ ◆
年老いても地域で暮らし

続けるには、地域の中で一人ひとりの顔の見える関係作りが大切。そのためには住民の協力が一番力になる。ある認知症利用者が行方不明になったことをきっかけに、地域でその人を「囲む会」を作った。行方不明になった時はみんなで手分けして探すことができる。誰かが困っている時に誰かが駆けつけてくれる。とても心強い関係だ。最近地元商店街の青年店主も参加するようになった。介護や高齢者福祉は一施設や家族だけで解決するのではなく、地域の輪を広げていくことで解決できることがたくさんある。



言・い・た・い

投稿欄

私の好きなグリーンコープ商品

コーヒータイムの幸せ

私の好きなグリーンコープの商品で、よく購入するのは「卵」と「牛乳」。スーパーストックのものに比べたら質のよさがよく分かる。卵の黄身は色もよく、白身は弾力がある。卵を割るたびに感動する。一個一個、宝物だと思える。この卵6個ほどで作るシフォンケーキの味は、また格別である。毎日食べても飽きがこない柔らかさと風味にできる。また、グリーンコープの牛乳でカスタードプリンを作ってみる。濃厚に仕上がります。最高だと思う。育ち盛りの息子は、ごくごくよく飲む。骨折ひとつせず成長させてもらっているのはこの牛乳のおかげだと思う。家族全員がファンで、夫と私



はコーヒーに必ず入れる。週に一度、手作りのケーキとカフェオレでいただく午後の時間は至福のひととき。卵よ、牛乳よ、健康と幸せを運んでくれてありがとう！と心から言いたい。

グリーンコープ生協ふくおか

内田 理加子

投稿募集中

グリーンコープ誕生20年によせて

私の好きなグリーンコープ商品

●400字程度 ●A4切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX・Eメールでお送りください。
掲載分には図書カード(500円分)進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅前2-36 博多ビル7F
グリーンコープ「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメール riko@greencoop.or.jp

グリーンコープがめざす

生活協同組合

グリーンコープ誕生前夜3



グリーンコープの前身生協群は「共生社」(共生社生協連合)と「ちくれん」(福岡地区事業生協連合)という二つの組織に集約されていきました。

「ちくれん」は班を中心にして、組合員同士や組合員と専従職員との関係を大切にする協同組合としての基本に忠実な運営を行っていました。商品の一つひとつに組合員の思いを凝縮させながら、生産者やメーカーと深く連携し、ていねいに開発してまいりました。当然組合員の商品に対する思い入れやこだわりは強いものがありました。また、生協の事業と運動も組合員と専従職員が一体となって運営してまいりました。そうした意味で、コンピュータの導入や事業の効率化によって人間関係が希薄になることなどを危惧し近代化には慎重でした。

一方、「共生社」はせつけん派生協の中ではコンピュータの導

入など事業の近代化に早く着手しました。しかし、それでも日本中の巨大生協から見れば10年近く遅れていました。「ちくれん」はそれ以上に遅れるという状況でした。巨大生協の近代化による躍進の中で、せつけん派生協は経営的に行き詰まっていきました。グリーンコープ連合前専務理事行岡良治さんは、そうした当時の両連合会のような「飢餓(ひもじい)同盟」と表現しています。

もちろん両連合共に、食べものの安全性を追求する、自然や環境を守る、人と人との関係を大切に、という姿勢で事業と運動に取り組む生活協同組合であったことは言うまでもありません。

厳しい経営局面を乗り越え新たな飛躍をするために、「共生社」と「ちくれん」は両者に通底する理念を基本に、グリーンコープの結成へと歩みはじめます。

2008年8月の組合員数 395480人 (8/26現在)

リユース リサイクル データ

2008年7月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドバック
回収本数 1,201,923本 回収率 100.2% (6月15日～7月19日回収分)	今月のデータ掲載はありません	回収重量 13,341kg 回収率 58.6%	回収重量 38,510kg 回収率 112.4%

グリーンコープ

組合員
ワーカーズ
職員
リレーメッセージ

未来へつなぐ20年 私の思い

グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの
人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つ
とつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープ
の成熟へとつながってきています。この一年間、さま
ざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもと
いていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワ
ーカーズ・職員からのリレーメッセージを掲載します。



テレビから流れてくるコ
マシヤル：「んっ！」画面
に映る「グリーンコープ」の
文字に一瞬、誇らしい気持ち
に包まれる。

「YES」と言わなくても
の何もないでしよう？」。
友のその一言に押されて組織
委員長を引き受けた。誰でも
できるとは言うものの、乏し
い知識と狭い世界で生きてき
た私にとって、なかなかの重
責だった。

笑い、泣き、どれだけ自分
を見つめたことだろう。グリー
ンコープで語った言葉はいつ
も真剣だった。

こうしてペンを執っている
と懐かしい顔が浮かんでく
る。委員会での同士、日本各
地の志を同じくする人たちが、
韓国やネグロス、その他アジ
アの人たち、学習会での講師
の方々、すべてが大切な思い
出として機会あるたびに思い
返している。

グリーンコープで経験して
きたのは、机上のことだけで
はなく、実際に世間に向かっ

グリーンコープは思い出と共に私の中に生きている

元グリーンコープ連合組織委員長 大坪 静子

て声をあげ、訴え続けること
だった。

例えば、グリーンコープの
「平和」は行動することをと
おして考え、実感を持つて平
和を願う。口先で平和を語る
ことは易しいけれど、自転車
隊のように汗を流して不戦を
訴え続けることは、日本の中
でまだまだ少ない。環境を守
ること、食を守るなどなど
と、確実に行動し続けるグリー
ンコープ。そこでひととき
活動を共にすることで、多く
を学び、それらは今も生きて
いる。

信じるのが難しくなりつ
つあるこの時代に、唯一、生
活のすべてを委ねることがで
きるグリーンコープは、これ
からも揺るぎない、市民の先
達であってほしい。

私のまわりをトコトコと歩
きはじめて小さな命の将来を
思う。「緑は残っているだ
ろうか?」「安全な食べもの
が手に入るだろうか?」「銃
を手に戦の下にいないだろ
うか?」。心配は尽きないが、
憂えるだけでは一歩もすすま
ない。大牟田の地でさきやか
ながら、私のできることを
行動していくのみだ。
私にとっての拠り所はこれ
からも、グリーンコープにあ

今から7年くらい前、配送
パートだった私たちは個人宅
配のワーカーズを立ち上げた。
それまでの雇用される
という関係から自分たちで自
主運営をしていくひとつの組
織としてグリーンコープとか
かわってききました。ワーカー
ズとはどのような働き方なの
か手探りの中、答えを探しな
がらすすんできたと思います。

私が所属している「終」と
いう配送ワーカーズは旧グリー
ンコープの7つの配送ワー
ーカーズがひとつになってでき
ています。「終」ができる過程
ではたくさんの出会いがあり
ました。他の配送ワーカーズ
も同じ課題を抱えていて、ひ
とつになることで解決してい
こうと「終」を立ち上げまし
た。その後グリーンコープは
福岡県内統一をし、私たちも

グリーンコープ誕生 20周年を迎えて

北九州個配ワーカーズコレクティブ終
副代表 渡辺 純子



もつと多くの配送ワーカーズ
と出会うことになりました。
今、福岡県のほかの配送ワ
ーカーズと一緒に課題の解決
をめざし、今年度ふくおか共
同購入ワーカーズ連絡会を立
ち上げました。これから配送
だけでなく、それにかかわる
仕事も増やしていきたいと考
えています。慢性的な人員不
足や労働条件、社会保障など、
福岡県全体の配送ワーカーズ
が連帯することによって、も
っと大きな力となりました。共
同購入ワーカーズとして、今
まで「終」で解決できなかった
ことも解決できるのではと、期
待に胸をふくらませています。

2007年からグリー
ンコープ地域運動交流集会にも参
加することで、福岡県の配送
ワーカーズを知っていただく
ことができました。

私自身も他県の共同購入ワ
ーカーズとも出会うことが出
来ました。このような機会を
与えていただき感謝していま
す。連帯、交流という意味で
大きな広がりを感じました。

グリーンコープは組合員、
生産者、地域の方、その他た
くさんの人とのつながりで成
り立っており、それがグリー
ンコープの大きな力になっ
ていると思います。

私たちワーカーズも人と人
のつながりで成り立っていま
す。そのつながりをもつとも
と広げていくことが共同購入
ワーカーズの未来をきつと明
るくします。これからもい
ろんな人と出会っていきたい、こ
れからのグリーンコープにおお
いに期待し30周年も40周年も
一緒に迎えていきたいと思
います。



「明日(未来)」のために

グリーンコープやまぐち生協
専務理事 工藤 正直

年という節目の年を迎えました。
この記念すべき節目の年を迎え
るに当たり、これまでの軌跡を確
認しあうと共に、今後10年先、20
年先もグリーンコープがグリー
ンコープで在り続けるためにも、史
上最大の飛躍への挑戦を決意し、
推進してまいりました。お取引先のみ

きた時間の中でもそうでしたが、
グリーンコープはその時代・その
場面・その時々、常に革新し続
けてきました。これまでもそう
あるように、これからもグリー
ンコープらしく存在するために、
20周年事業を成功させ未来(明日)
へ歩み続けていきたいと思います。

1992年11月20日、当時山口
県内の三生協(グリーンコープ生
協やまぐち西部、グリーンコープ
ほうふ生協、グリーンコープいわ
くに生協)が合併総会を開催し、
グリーンコープやまぐち生協が誕
生しました。私は、その前年(1
991年)5月に当時のグリー
ンコープ生協やまぐち
ち西部へ入協しま
した。

で、担当するすべての組合員から委
任状・書面議決書の回収を行い、
合併総会の開催に向けて足を引
張らないようにしよう」と精一杯
努力した自分に、二十歳前の初々し
さという恥ずかしさを覚えます。
それから約16年が経過し、今年
度はグリーンコープ連合誕生20周
年を迎えました。

戦ははじまったばかりであり、これ
からも挑戦し続け
ることが私たちに
求められています。
受け止めています。
私のかかわって